

未来型医療創造卓越大学院プログラム 授業報告書

バックキャスト研修—気仙沼市立病院

(2019 9/2~9/6)

2019年9月27日

Eグループ

研修前の常識、知識

研修前は、地域医療の現状や病院の役割についての知識はほとんどなかった。また、気仙沼がどのような特徴を持った地区なのか、そして東日本大震災からの復興の現状もあまり知らなかった。

授業の目的

気仙沼市立病院研修で震災後の地域医療の実情を見聞し、今の問題点やこれからの地域医療体制について考える。

達成目標

研修が終わった後、地域医療の現状や問題点を把握し、地域社会を基にした未来の少子高齢化社会を想像することができる。

授業内容

<気仙沼市立病院の医師、看護師、地域医療連携室による講義>

研修は講義と見学を組み合わせながら進んだ。講義では脳卒中、心疾患、消化器疾患、呼吸器疾患、褥瘡など地域病院で一般的に見られる問題を学び、疾患の概要について理解を深めた。

また、地域の人口動態や今後の予測、地域医療の現状についても学んだ。もともと気仙沼は高齢化が進んだ地域だったが、震災後に急速に人口が減少し、若い世代がますます不足している

ことを知った。そのため、医療や介護の担い手が不足し、医療者の負担が大きくなる問題が生じていた。また、人口構成の変遷に伴って、急性期病床から回復期病床に需要がシフトし、病院として対応していく必要があると学んだ。予測では、いずれ必要な病床数が不足し、在宅での医療や看取りが必要となるが、実際に医療資源（特に人材）が乏しい地方では在宅医療の需要を満たせるか疑問が残った。今後、IoT の導入や遠隔診療を普及させるなどして現場の負担を軽減し、医療が崩壊しないように何らかの手段を講じる必要があると感じた。

<本吉病院での訪問診療>

研修では本吉病院の訪問診療に同行し、実際の現場の様子を肌で感じることができた。13時から16時の間に4件の往診を行なった。それぞれADLの低下や通院手段がないなどの問題を抱えている患者さんであり、訪問診療はとても役に立っていた。通常の外来での診療以上に患者さんや家族の話を聞き、生活環境を見るなどしてより普段の生活に合った医療を提供できるという点においては、患者満足度が高く非常に感謝されている様子だった。しかし、家々の移動に時間を要するため診療効率が悪いという問題点を抱えていた。本吉病院ではある程度の医療情報をクラウド化して共有することで診療の効率化を図っていた。また、医師4人でチームとして診療することで、医療水準を担保するとともに、当番の負担を軽減できるように工夫していた。それでも十分な体制とは言い難く、今後も在宅医療が継続するためには、人員の確保が大きな問題となることが容易に推察された。

また、今後病床が不足する問題について横田院長に聞いてみたところ、気仙沼地区の高齢化の割合に比べると、入院してくる患者はさほど増加しておらず、横ばいで推移しているそうである。その理由としては、おそらく子供がいる都市部の病院に行っているのではないかという見解だった。今回の研修で、地域病院の医療資源は限られており、訪問診療の拡張も困難であることを理解した。そうであるならば、患者自身がその地域の現状を理解し、自分が受けたい医療を考えて病院を選択するというのも、これからの医療体制の一つの在り方なのではないかと考えた。

<病院の各科の見学>

気仙沼市立病院の研修では、ファシリテーターの先生及び病院の医師や看護師と一緒に病院のいくつかの科を見に行った。医療従事者ではない学生にと



写真：薬剤部見学の様子

って、病院の様々な科を見学するのは初めてであり、新鮮な経験であった。放射線科、透析室、救急救命室、消化器内科、薬剤科などを見学し、現在使われている装置、働いている様々な職種の人、医療現場の現状を見させて頂いた。病院見学を通して、現行の医療法や装置にはまだまだ改善の余地があると改めて実感した。例えば透析方法では、週に3回、1回の透析に患者さんが4時間ベッドに寝たまま、一人当たり120リットルの水を使用しているという事実は、余りにも非効率的で、患者さんの理想 QOL からまだ遠いと感じた。一方、薬剤科では既に自動調薬器や注射剤調整機器が導入されており、薬剤師の仕事量の軽減と効率化が進んでいるこ

とが分かった。更に、4 日目で手術室を見学し、乳腺腫瘍や前腕動脈血栓を取り除くための手術の現場を見させて頂いた。手術現場を観察した後、より低侵襲な治療方法は必要であると感じた。なぜなら手術は身体の切開だけでなく、麻酔薬を投与し患者さんの痛み感覚、場合によって患者さんの意識も一時的に無くす必要があり、患者さんが少なからず苦しまざる得ない状況になってしまうからである。

<その他：看護学校、病棟、伝承館>

他にも看護学校や病棟を見学してきた。看護学校は病院の中に設置されており、地域で看護師になる若者を養成する役割を持っている。在宅医療や震災対策などの教育内容が含まれており、地域の少子高齢化や震災地の医療に対応できるような将来の看護教育が充実しており、未来の医療のための一つの対策方法として非常に興味深かった。

最終日に病棟を見学した。病棟には面談室が設置され、そこで手術や麻酔などの医療行為を受ける前の説明ビデオが用意されており、非常に印象的だった。気仙沼市立病院ではこのようなビデオを10年前近く前から作り始めており、患者さんと医師の信頼構築、そして医師の仕事負担の軽減にも繋がっていた。

病院以外では気仙沼階上中学校跡に建てた津波伝承館や三陸復興国立公園に行った。震災後、人口が大幅に減った気仙沼市の当時の状況や受けた被害などに触れることができた。震災



写真：伝承館

の被害を受けていない人にとって、映像や写真、被害を受けた建物を通して大震災の様子を知ることができ、多くを考えさせてくれる素晴らしい施設だと感じた。

研究や仕事などに活かせる点、影響を受けたことなど

・地域医療と大学病院などの違いを知ることができ、自分が未来の医療にどのように貢献できるのかを考える際の視野を広げることができた。

・地域の医師不足、高齢化、人口減少、災害復興などの現状を知り、これからの医療を考えていく時には、医療だけでなく社会の仕組みも同時に考えていく必要があると感じた。

・地域病院研修では食事会を通じて気仙沼で活躍している初期研修の医師から病院長との交流ができ、穏やかな雰囲気の中で医療の現状、改善できればいいもの、これから行うべきことなどの話ができて、非常に貴重な機会だった。

来年度以降の改善点、授業の限界

地域病院の研修は、東北大学の外部で行われているため、他の研修と比べて調整が必要となる。来年度以降はある程度内容を定めた上で、研修に行く前に想定できるようなものになることが望ましい。また、学生の中には医療従事者（医師、歯科医師）がおり、その方々にとって病院見学は初期研修などで既に経験したものであるため、今回の病院見学はおまけのようなものになってしまう。来年度は、医療従事者の学生を考慮した病院見学にすることが望ましい。

まとめ

地域病院研修では、病院見学や訪問診療などを通じて地域医療の現状及び改善できるものについて学ぶことができた。今回の研修で得た知識や経験が、少子高齢化社会の対策方法を考えるきっかけになり、大学院卒業後の進路選択に活かしたい。